



研究領域名 精神機能の自己制御理解にもとづく思春期の人間形成支援学

東京大学・医学部附属病院・教授

かさい きよと
笠井 清登

【本領域の目的】

人間の脳がつむぎ出す精神機能の最大の特長は、高度な言語能力と社会性の上に自我が成立し、その精神機能が再帰的に制御可能な点にあります。これによって人間は自ら脳機能を制御し、意識的な自己発展を図ることができます。

この「精神機能の自己制御性」は、進化の過程でヒト前頭葉が格段に発達した中で獲得されたもので、個体においても前頭葉が成熟する思春期に確立します。思春期とは、社会環境に適応した自己を形成するための極めて重要なライフステージであり、ここでの発達の歪みは現代の若年層に見出される深刻なこころの問題に多大な影響を及ぼします。

本領域は、精神機能の自己制御性の成立、思春期における発達過程を個人・集団レベルで解明し、分子から社会までの統合的・学際的アプローチによって、思春期における自己制御の形成を支援する、新たな総合人間科学を確立することを目的とします。

【本領域の内容】

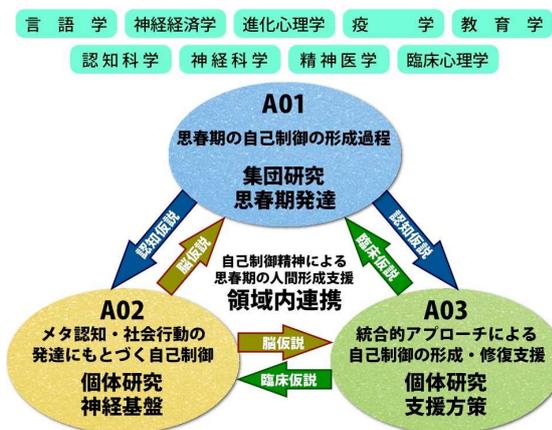


図1 領域の内容

本領域は、10代の地域標本からなるティーンコホートを対象に、思春期における精神機能の自己

制御性の形成過程を解明する A01 班； 精神機能の自己制御とその思春期発達の神経基盤を明らかにする A02 班； 同定された神経回路基盤をターゲットに、分子、神経モジュレーション、心理・社会的介入による具体的な支援策を開発する A03 班から構成されます。

【期待される成果と意義】

本領域の推進により、精神機能の自己制御性の成立、思春期における発達過程を個人・集団レベルで解明し、コホートからのエビデンスによる教育への提言や、自己制御の発達に対する具体的な支援策の開発を通じて社会に貢献します。認知科学・心理学・言語学・教育学・疫学という人文社会科学と、精神医学・神経科学という生命科学、それらをつなぐ進化心理学・神経経済学という新興学問分野の融合を促し、総合人間科学を確立するにより、脳科学と社会・教育を架橋します。

【キーワード】

思春期：人間が社会との交流を通じて自我を育み、人間性を形成するために極めて重要なライフステージ。長い思春期は、進化史上人間に特徴的であり、これは、大脳皮質のなかで最後に前頭前野が成熟することと対応。

精神機能の自己制御：進化過程で発達した前頭前野を活用して自我機能を成立（自己像を形成）させ、自分自身の精神機能さらには脳機能を自己制御する、人間に独自の能力。

【研究期間と研究経費】

平成23年度－27年度

1, 145, 200千円

【ホームページ等】

<http://npsy.umin.jp/amr/index.html>